

陳舜臣さんを語る会通信

NO.18

Sep. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年9月15日

清末の閉塞感を胸に植えつけて書いた『江は流れず-小説日清戦争-』

『江は流れず-小説日清戦争-』の初出は中央公論社『歴史と人物』1977年6月号～1980年11月号です。

以下、集英社発行『陳舜臣中国ライブラリー6』「自作の周辺」から引用します。

題名の由来について、陳舜臣さんは、

当時の中国人は時局にたいするいらだちを、「山は睡り、江は流れず」と表現したものである。その句を胸に植えつけて書き進めたい。

と述べておられます。『江は流れず』とは時代の閉塞感を言っているのです。

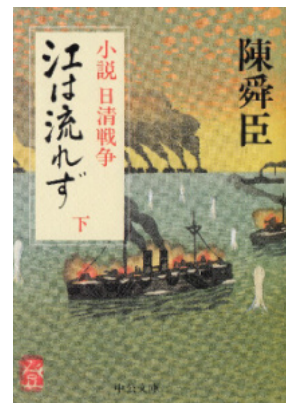
次の文章から、陳さんの視点がよくわかります。

日本と中国は、おなじところに相前後して鎖国状態

がとかれ、なま身の国家としてあいまみえることとなった。同時代ながらも、日本では国家の青春期の明治であり、中国ではその老衰期の清末であった。運命の邂逅というべきであろう。私はこの出会いを、おもに中国側から、そしていわゆる「日清戦争」に焦点をあててえがいてみようと思う。

画像は中公文庫表紙 →

(編集委員 橘雄三)



《朝鮮、及び清国の内情・政情》

〔朝鮮〕

朝鮮は、500年続いた李氏朝鮮の末期にありました。1910年、日本に併合されます。

閔妃 (壬午軍変、一時、大院君)	1876	日朝修好条規
		朝鮮は日本に対し、釜山、仁川、元山を開き、ソウルに公使館を、また、開港場に領事館を設置し、領事裁判権を与えた 続いて1882年、米鮮条約、英鮮条約
	1882	壬午軍変(じんごぐんへん)
閔妃		1873年に大院君(だいいんくん)を引退させて以来、閔妃(びんひ)一族が実権を握っていた。この事件は、大院君派の巻き返しクーデターである。1876年、朝鮮が無理に開国させられ、日本商人によるはげしい収奪を受けた結果、米価がはね上がり、兵士や民衆の生活を圧迫したという背景があった。一時は成功したかにみえたが、大院君が清軍に捕らえられ閔氏政権が復活した
	1884	甲申事変(こうしんじへん)
		金玉均、朴泳孝ら親日派独立党のクーデター。失敗。金、朴らは日本に亡命。竹添公使や駐留していた日本軍が関わっていた。袁世凱の素早い対応にやられた感あり
	1894	甲午農民戦争

〔清国〕

清朝の皇帝は、アヘン戦争期からいうと、⑧道光帝、⑨咸豊帝、⑩同治帝と続きます。アヘン戦争、

太平天国の動乱、第二次アヘン戦争のあと、同治の中興で政情は一時安定しますが、『江は流れず』の時代は、⑪光緒帝(位1874-1908)で、またまた多難でした。

光緒帝は死ぬまで、西太后(1835-1908)の顔色をうかがい、頭が上がりませんでした。そしてこのことは、北洋軍を背景に、最高の実力者李鴻章も、軍機処に詰める大臣たちも同じことで、西太后にはものが言えませんでした。

この時期、西太后の最大の関心事は、人工の山、人工の湖を持つ別荘、頤和園の建設で、陳さんは、費用を「銀三千万両」と記述しています。これは、国家予算の何年分にも相当する額で、北洋艦隊の新艦購入など整備を急ぎたい李鴻章を悩ませました。



いわえん

頤和園 いまは、北京市民の憩いの場である

編集委員撮影

主な登場人物 ほか

《 1. 主な登場人物ほか 》

えんせいがい 袁世凱	作品冒頭、24歳の軍人として登場。のち李鴻章の門下に入り、李の死後、軍隊を相続
ていじょしょう 丁汝昌	北洋海軍の水師提督。黄海海戦に破れ服毒自決
りこうしょう 李鴻章	清朝末期を代表する政治家。北洋軍を指揮下におく。日清戦争の講話を結ぶため来日。狙撃され負傷
りしおう 李昉	李太王(李熙)の生父(大院君)で、摂政として約十年間実権を握った
閔妃 びんひ	李太王の妃。閔一族が実権を握る
きんぎょくきん 金玉均	清国の宗主権を跳ね返すため日本の力を借りるべきと説く開化党(独立党)の中心人物。クーデターに失敗、日本へ亡命。上海で暗殺される
ぼくえいこう 朴泳孝	金玉均と同じく開化党(独立党)の中心人物。金玉均とともに日本へ亡命
はなぶさよしもと 花房善質	駐朝鮮初代公使。1882年の壬午軍変時の公使
竹添進一郎	壬午軍変後の駐朝鮮公使。甲申事変に参画、その敗北で罷免
福沢諭吉	金玉均らを操って、日本の国益に沿う政権をつくり出そうとする
ごていほう 呉廷芳	法律に詳しい李鴻章の幕客。甲申事変を処理した天津条約の際も、下関条約のときも随員。李鴻章の死後、外交面の遺産を引き継ぐ
伊藤博文	当時、1885.12-88.4、1892.8-96.8、首相。天津条約、下関条約ともに日本側全権大使として締結にあたる
陸奥宗光	伊藤博文内閣の外相。陸奥外交の全貌を記した『蹇蹇録(けんけんろく)』を残す。陳舜臣さん度々引用
きょうしんのう 恭親王	奕訢(えききん)。咸豊帝の弟で筆頭軍機大臣。西太后が権力を握るのをバックアップ
さいせいぐ 崔濟愚	「東学」をおこす。1864年、逮捕処刑
ぜんほうじゅん 全瑬準	甲午農民戦争の指導者
川上操六	陸軍中將、参謀次長。事実上、全陸軍をにぎっていた
こうしょうう 洪鐘宇	朝鮮人。亡命中の金玉均に、自分を売り込むか、暗殺するか二つの思惑で近づく。上海で金を殺害
大鳥圭介	駐清公使兼駐朝鮮公使。日清が協力して列強の干渉を朝鮮から排除しようというのが持論であったが…

1882年、壬午軍変時の清軍出兵から話は始まりません。陳舜臣さんの、若い袁世凱描写が素晴らしい。『江は流れず』(上)の半ばは、袁世凱が主人公かと思えるほどです。あと、日清戦争の経過、下関での講和条約会議など、よく知られた出来事なので、ここでは略します。

《 2. 日清戦争経過図 》

下図は日清戦争経過図です。原田敬一『日清・日露戦争』(岩波新書)より。



《 3. 春帆楼 と 李鴻章の負傷 》

日清講和条約の締結会場となった春帆楼は、かつて豊前中津藩の御殿医だった藤野玄洋が開業した医院を、のちに玄洋の妻が改装して始めた割烹旅館です。「春帆楼」の名は、玄洋と親交の深かった伊藤博文が、「春うらかな眼下の海にたくさん帆船が浮かんでいる」様子からつけたといわれています。

李鴻章が群馬県人、小山豊太郎に狙撃され負傷したのは、春帆楼から宿舎へ帰る途上の出来事でした。



再現された日清講和条約締結会場。日清講和記念館HPより

『江は流れず』の特徴 & 読者の反応

《 1. 『江は流れず』は実録風 》

『阿片戦争』、『太平天国』、『江は流れず』、『山河在り』は、陳舜臣さんの中国歴史小説四部作といえます。しかし、『江は流れず』以外は、連家、温家の人たちが登場し、重要な役柄を演じるのですが、『江は流れず』だけは架空の人物が登場しません。そして、フィクション部分が少ないように思えます。これについて、陳さんは次のようにおっしゃっています。

たしかに実録風ではありますね。というのは、一つには日清戦争についての資料が大量にありましてね。いろいろ集めて、それを参考にしたんです。それで、そっちに引っ張られてしまった感じがあるんです。

それと、もうひとつ。『阿片戦争』のようなやり方は、ちょっと調子に乗りすぎると歴史小説としておかしくなるんじゃないかな、ということを以前から思っていたんですよ。

また、大量の資料で、いちばん役に立ったのは、

台湾の国防委員会のものですね。これまた膨大な量なんです。中日韓関係資料といいまして……。当時の電文なんかも、いっぱい残っています。

とおっしゃっています。(以上、引用は『陳舜臣

中国ライブラリー6』「自作の周辺」から)

《 2. 『江は流れず』、読者の反応は？ 》

文庫本(中)の裏表紙に、「戦争への緊迫の過程を精細に描く歴史大作」とあります。陳さんが「実録風」とおっしゃったり、出版社の宣伝文句に「戦争への過程を精細に描く」とあったり、このことは、読者にとってはどうだったのでしょうか。読者の感想をネットから拾ってみました。

■これが小説？学術書みたいでちっとも面白くない。

■まあ陳舜臣氏なんで、中国関連の情報が詳しいだろうなあと思ったらその通りでした。

■陳舜臣が描く日清戦争。なかなかこの時代を描く歴史小説がない中で 朝鮮半島の情勢・袁世凱など、中国の動きを 克明に描写。ある意味、中途半端な参考書より、この時代がよくわかる本になっている。それにしても、朝鮮半島をめぐる日本・清の権謀術数はすさまじい。また、李鴻章・伊藤博文などの存在感が抜群で、歴史が好きな人には、たまらない本になっている。

人それぞれ、様々ですが、私(橘)は、文庫本3巻、読み通すのに、やはり、根気が要りました。

きやくしゅ
韓国ドラマ「客主」に描かれた時代

私は、韓国ドラマはめったに見ないのですが、『客主』は52話、ほとんど見ました。ドラマは、19世紀末の朝鮮王朝時代を舞台に、行商人チョン・ボンサムのはたけを舞台に、波瀾万丈の生涯を描いています。

1876年、日本との間に日朝修好条規が結ばれます。釜山、仁川、元山が開かれ、開港場には日本の商人がどっと押し寄せ、高い値で米などを買い占め、朝鮮の人々の生活は苦しくなります。朝鮮の商人と日本商人とのトラブルも頻発します。また、1882年の壬午軍変も描かれます。

『江は流れず』の記述です。

清国商人の進出も、朝鮮の人々の反感を買った。朝鮮では李朝初期から「六矣塵」という六軒の御用商店が、独占的に商業を営んでいて、下部組織も四百年のあいだに固められている。駐留軍の武力をバックにした清国商人の進出は、四百年の経営組織、ひいては生活体系を揺るがせたのである。

陳さん記述の「六矣塵」は、「ユギジョン」という発音で、ドラマに登場します。しかし、ドラマでは、

朝鮮商人と衝突するのは、陳さんの記述と違って、日本商人なのですが…。



トラブルにピストルを取り出す日本商人 →



左の画像、開港場には、日本資本が入った商社もできます



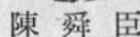
左の画像、朝鮮商人と日本商人(山高帽)の衝突事件

だいさい

陳さんは、いつ、大寨へ行かれたのでしょうか。大

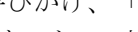
ところで、下に掲載した新聞記事ですが、拡大鏡を使ってでもご一読願います。 （編集委員 橘雄三）

新中国を支える根



自力で農業の模範に

胸打つ村人の心意気



の呼びかけ、「農業学大寨」で有名になった。快資訊HPより

毛沢東
一躍有

と呼ばれる鉄橋も、専門家の指導を仰いだが、その建設は大衆の人たちが自分の手で完成したという。

しをした書記が、文革のときに批判され、それ以来、この村も大躍の自力更生路線に従って、自然改造に取り組みようになった。私が

訪ねたときも、耕地拡大のためハツバの音が、ときどきこえた。
「批判された当時の書記はどうなりました？」

「その人は非を認め、いまだは
圖書記に返り咲いてゐます」と。

と、その副書記さんはここに
笑いながら答えた。

(作家)



毛沢東の呼びかけ、「農業学大寨」で一躍有名になった。快資訊HPより